放眼日中

W杯と中国

中国の友人と雑談しているとよく出てくるのがサッカーの話題、「日本の代表チームはいいよな、毎回ワールドカップ（W杯）に行けて」。確かに日本は5大会連続で出場し、かたや中国は2002年の日韓W杯の出場1回にとどまっており、しかも最近ではアジアの最終予選にすら残れないほど、力が落ちてしまった。中国サッカー界の体質には大きな問題があると友人は指摘し、「それはサッカーだけではなく、今の中国の国情をよく表している」と嘆く。

2年間中国のローカルチームで指揮を執った岡田武史・元日本代表監督のインタビューを読んでも、「練習に対する選手の意識が低い」「監督の選手起用などにえこひいきが横行している」「選手の親や親戚が起用法に関してクレームをつけてくる」など、ちょっと考えられないような実態を述べており、中国サッカーの現状がいかに深刻かよく分かる。

中国人のサッカーファンも自国チームや選手を見放し、国内リーグの観客が激減、ここ数年はプレミアリーグで活躍する香川やイタリアに移籍した本田など、日本選手を称賛する声が多く、今回のW杯でも中国版ツイッターの「微博」などネット上では日本チームに対する期待などが多く寄せられたとも聞く。また、中国では代表チームを強くすることを諦め、外国人を入れられるクラブチームの試合に力を入れ始めている。

「日本代表はアジア最高のチームとして世界と互角に渡り合ってきた。尊敬すべき対象だ」と、ある中国人の若者が興奮気味に話していたのをよく覚えている。巷（ちまた）では反日だ、尖閣だ、と騒いでいる時、自国と比べて良いものは良い、ときちんと評価していたのだ。

だが、その日本チームも選手が「優勝」を口にするなど勇ましく出場はしたものの、結果は惨敗に終わった。今回のW杯には多くの課題が見つかり、中国とは違った意味で危機的な状況ではないかと思われることもある。実際にヨーロッパでプレーする選手があれだけいて、「世界との差」が分かっていなかったなどということはないだろう。ある選手は「世界との差は初めから分かっていた。それでも勝ちたかった」とインタビューに答えている。これが正直な感想であり、現状ではなかろうか。まるで高校野球のコメントのようで、選手が可哀想（かわいそう）に思えてくる。

期待を掛けてくれていた中国人の日本サポーターからも、落胆の声は上がった。それでも筆者の周囲では「監督の采配の問題」「選手のコンディションが悪かった」など、日本チームや日本を非難する声はあまり聞かれなかった。むしろ、韓国チームの態度や応援団に対して厳しい意見が多かったのは意外だった。政治的には中韓が接近しているのに。

だが同時に別の中国人は「W杯に中国チームが出場するかどうかも、日本の勝敗もどうでもいいんだ。このようなスポーツイベントは格好の賭けの対象。仲間内で盛り上がるには一番面白い」と、やや投げやりに話す。それでも自国チームが出場すれば大いに盛り上がるのは必定。次回は日中揃（そろ）ってワールドカップに行けるように頑張ってもらいたいものだ。

コラムニスト・アジアンウオッチャー
須賀　努

すが・つとむ　東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。